

答えは、解答用紙に書きなさい。また、字数制限のあるものは句読点・記号もふくむものとします。

| | |
|------|--|
| 受験番号 | |
|------|--|

(一) 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。(本文には、ことばや漢字を改めたり、省いた部分があります。)

科学について、何かを論じようとする場合に、まず取り上げるべき問題は、科学の限界の問題である。今日われわれが科学とA称しているものには、その取り扱い得る問題に、限界があるか否かということ、まずaクントウして見る必要がある。

今世紀にはいつて、科学が非常に進歩し、特に自然科学が最近になって、急激な発展をとげたことは、今更述べ立てるまでもない。Bいわゆる人工頭脳のような機械ができたり、原子力が解放されたり、人工bエイセイが飛んだりしたために、正に科学ブームの世の中になった観がある。そしてこの調子で科学が進歩をつづけて行くと、近い将来に人間のあらゆる問題が、科学によって解決されるであろう、というような錯覚に陥っている人が、かなりあるように思われる。

もちろん科学は、非常に力強いものではあるが、科学が力強いというのは、ある限界の中での話であって、その限界の外では、C案外に無力なものであることを、つい忘れがちになっている。いわゆる科学万能的なものの考え方が、この頃のcフウチヨウになっているが、それには、①科学の成果に幻惑されている点、かなりあるように思われる。これは何も人生問題というような高尚な話ではなく、自然現象においても、必ずしもすべての問題が、科学で解決できるとは限らないのである。今日の科学の進歩は、いろいろな自然現象の中から、今日の科学に適した問題を抜き出して、それを解決していると見た方が妥当である。もっとくわしくいえば、現代の科学の方法が、その実態を調べるのに非常に有利であるもの、すなわち自然現象の中のそういう特殊な面が、科学によって開発されているのである。

それはどういふ面かというに、まず第一に、一番重大な点をあげれば、科学は再現の可能な問題、英語でリプロデュースイワれている問題が、その対象となつている。もう一度くり返して、やってみることができるという、②そういう問題についてのみ、科学は成り立つものなのである。

なぜ再現可能の問題だけしか、科学は取り扱い得ないかといえば、科学というものは、あることをいふ場合に、それがほんとうか、ほんとうでないかということという学問である。それが美しいとか、善いとか悪いとかいふことは、決していわないし、またいふこともできないものである。

それでは科学で、ほんとうであるというのは、どういうことかということ、まず考えてみる必要がある。ごく簡単な場合についていえば、いろいろな人が同じことを調べてみて、それがいつでも同じ結果になる場合には、それをほんとうというのである。もつとも同じことを同じ方法で調べることができない場合もある。しかし人間が自然界を見る時には、いつでも人間の感覚を通じて見るわけであるが、この感覚を通じて自然界を見ることによって、ある知識を得る。その得た知識と、ほかの人がその人の感覚を通じて得た知識との間に、互いに矛盾がない場合には、われわれはそれをほんとうであるという。そうでない場合には、それはまちがっているというわけである。

感覚を通じて自然界を認識するといったが、その中で一番簡単なものは、いわゆる③測定である。ものを測るといふのは、どういうことであるか。ここでは簡単な場合だけについて考えよう。ものを測るといふことは、測ろうとするものと同じ種類のもので、ある一定の量のものをとって、その量と比べてみることである。この一定量を単位というが、目的とするものが、この単位の何倍あるかを調べることが測定である。「何倍」といふのは、もちろん整数である必要はなく、コンマがいくつついていてもかまわない。しかし、何倍という以上、これは数値でもってあらわされる。この数値であらわされるということが、大切な点であって、いったん数値になれば、これに数学を使うことができる。自然現象を数値であらわして、数学を使って知識を総合していく。これが科学の一つの特徴である。これを反面からいえば、自然現象の中から、数値であらわされる性質を抜き出して、その性質を調べるといふ方向に、科学は向かっていることになる。自然現象をただあるがままに見ただけでは、手のつけようがない。それでいろいろな方法によって、得られた多くの知識を整理していくのであるが、そのうち一番簡単なものが測定なのである。自然現象を数値であらわして、その数値について、知識を深めていく。これが科学の基礎となつている方法である。

受験番号

問八

□に入ることばとして、最もふさわしいものを、次から選び、記号で答えなさい。

ア 否 イ 可 ウ 未 エ 有 オ 無

問九

——線⑥「現在の科学が自然界についても持っている認識とは、性質の異なるものである」とありますが、これは幽霊がどうい
ものであるということですか。最もふさわしいものを、次から選び、記号で答えなさい。

ア 心霊論者が、それが存在する証拠を出しても、信じる人が少ないもの。

イ 大多数の人にとって、一生かかっても見ることでできない、縁えんのないもの。

ウ どんな時にどうすれば見られるのか、はっきりと言うことができないもの。

エ 昔は信じられていたが、現代はほとんどの人がその存在を信じていないもの。

オ それを見たという記録は存在するが、その内容が正しいとは言えないもの。

受験番号

(二) 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。(本文には、ことばや漢字を改めたり、省いた部分があります。)

①その遊びにどんな名がついているのか知らない。まだそんな遊びを今の子供達が果してするのか、町を歩くとき私は注意して見ることがこれまで見たためしがない。あの頃つまり私達はその遊びをしていた当時でさえ、他の子供達はそういう遊びを知っていたかどうかも怪しい。一応私と同年輩の人に訊ねてみたいと思う。

何だか私達の間にだけあり、後にも先にも無いもののような気がする。そう思うことは楽しい。してみると私達の仲間の誰かが創案したのだが、一体誰だろう、あんなあわれ深い遊戯を創り出したのは。

その遊びというのは、二人いれば出来る。一人が隠れんぼの鬼のように眼をつむって待っている。その間に他の一人が道ばたや畑に咲いている様々な花をむしって来る。そして地べたに茶飲茶碗ほどの——いやもつと小さい、盃ほどの穴を掘りその中に採ってきた花をいい按配に入れる。それから穴に硝子の破片で蓋をし、上に砂をかむせ地面の他の部分と少しも変わらないように見せかける。

「ようしか」と鬼が催促する、「もうようし」と合図する。すると鬼が眼を開けて来てそのあたりをきよきよと探しまわり、ここぞと思うところを指先で撫でて、花の隠された穴を見つけるのである。それだけのことである。

だが②その遊びに私達が持った興味は他の遊びとは違う。鬼に隠しおおせて、鬼を負かしてしまうということや、鬼の方では、早く見つけて早く鬼をやめるということ等には大して興味はなかった。専ら興味の中心はかくされた土中の一握の花の美しさにつながっていた。

砂の上にそつと這わせてゆく指先にこつんと固いものがあたるとそこに硝子がある。硝子の上の砂をのける。だがほんの少し。ちょうど人差指の頭のあたる部分だけ。穴から覗く。そこには私達のこの見馴れた世界とは全然別の、どこかはるかなくくの、お伽噺か夢のような情緒を持った小さな別天地があった。小さな小さな別天地。ところが見ているとただ小さいだけではなかった。③無辺際

に大きな世界がそこに凝縮されている小ささであった。その故にその指頭の世界は私達を魅きつけてやまなかつたのである。いつもその遊びをしたわけではない。それをするのは夕暮れが多かった。木にのぼったり、草の上をとびまわったり、烈しい肉体的な遊戯に疲れてきて、夕まぐれの青やかな空気のとややかに私達の心も何がなし溶けこんでゆく頃にそれをした。それをする相手も、誰であつてもかまわぬというのではなかった。第一そんな遊びを頭から好まない仲間もあつた。女の子は大抵好きだった。(略)

二人か三人でその遊びをしたあと、家へ帰る前に美しい作品を一つ土中に埋めておきそのまま帰ることもあつた。その夜はときどき埋めて来た花のことを思い出し床の中でも思い出して眠るのである。

そんな時土中のその小さな花の塊は私の心の中のたのしい秘密であつて、母にも誰にも話さない。次の朝いつて探しあてて見ると、④花は土のしめりで少しも萎れずしかし明るい朝の光の中ではやや色褪せて見え私はそれと知らず幻滅を覚えたのであつた。また前の晩に埋めておいた花のことを次の朝、子供心の気まぐれに忘れてしまうこともあつた。そういう花が私達に忘れられたまま沢山土に朽て混じつたことだろう。

私達は家に帰る前に、また、そのとき使った花や葉を全部あつめほんとうに土の中に土をもって埋め、上を足でふんでおくこともあつた。⑤遊びのはてにするこの清算は私の心に美しいもの純潔なものをもたらした。子供でありながら A () いじらしいことをしたものだらう。

ある日の日暮どき私達はこの遊びをしていた。私に豆腐屋の林太郎に織布工場のツル——の三人だった。私達は三人同年だった。秋葉さんの常夜燈の下でしていた。

ツルは女だから B () 花をうまくあしらい美しいパノラマを造る、また彼女はそれをつくり私達に見せるのが好きだった。で始めのうち林太郎と私の二人が鬼でツルの隠した花を探してばかりいた。

私はツルのつくつた花の世界のすばらしさに驚かされた。彼女は花びらを一つずつ用い草の葉や、草の実をたくみに点景した。ときには帯の間にはさんでいる小さい巾着から、砂粒ほどの南京玉を出しそれを花びらの間に配した。 C () 花園に星のふつたように。そしてまた私はツルが好きだった。

受験番号

遊びには自ら遊びの終わるときが来るものだが、最後にツルと林太郎と二人で花を隠し私が一人鬼になった。「よし」といわれて私は探しにいったが、(D) 探しても見あたらない。「もつと向うよ、もつと向うよ」とツルがいうままにそのあたりを撫でまわることがどうしても見あたらない。⑥林太郎はにやにや笑って常夜燈にもたれて見ている。林太郎はただツルの花をうずめるのを見ていただけに相違ない。^{注5}「お茶わかしよ」とどうとう私は a かぶとをぬいだ。すれば、ツルの方で意外の処から花のありかを指摘して見せるのが当然なのだがツルはそうしなかった。「そいじゃ明日探しな」といった。(略)

それから以後たびたび思い出してはそこへ行って探した。花はもう萎れ果てているだろうということは少しも考えなかった。いつでも眼を閉じさえすれば、ツルの隠した花や南京玉が、水のしたたる美しさで薄明の中にうかぶのであった。誰か他の者に見つけ出されると困るので、私は一人のときに限ってそこへ探しにいった。

遊び相手がなくて一人寂しくいるとき、常夜燈の下にツルの隠したその花があるという思いは私を元気づけた。そこへかけつけ、探しまわる間の希望は何にもかえ難かった。いくら探しても見つからない焦燥もさることながら。^{注6}

ところがある日、私は林太郎に見られてしまった。私が例のように常夜燈の下を隅から隅まで探しまわっていると、いつの間に来たのか林太郎が常夜燈の石段にもたれて唐もろこしを食べていた。私は林太郎に見られたと気付いた瞬間盗みの現行を押えられたようにびくつとした。私は b とつさの間にごまかそうとした。

だが、林太郎は私の心の底までつまり私がツルを好いているということまで見透したようににやにやと笑って「まだ探いとるのけ、馬鹿だな」といった。「あれ嘘だっただよ、ツルあ何も埋けやせんだっただ」

私は、ああそうだったのかと思った。心に憑いていたものが除かれたように感じて、ほつとした。それからのち、常夜燈の下は私には何の魅力もないものになってしまった。ときどきそこで遊んでいて、ここには何も隠されては無いのだと思うとしらじらしい気持ちになり、美しい花が隠されているのだと思ひこんでいた以前のことを懐しく思うのであった。

林太郎が私に真実を語らなかつたら、私にはいつまでも常夜燈の下の隠された花の思いは楽しいものであったかどうか、⑦それは解らない。

新美南吉『花を埋める』

注 1 一握……ごくわずか。

2 無辺際に……広大で果てしないこと。

3 点景……全体を引き立たせるために物をそえること。

4 南京玉……ガラスや瀬戸物で作られたごく小さな穴の開いた飾り玉。

5 お茶わかしよ……降参、まいったの意味。

6 焦燥……いらだち、あせること。

問一 線①「その遊び」について、次の問いに答えなさい。

1 「その遊び」のやり方を説明している部分を本文よりぬき出し、最初と最後の五字(句読点をふくまない)を書きなさい。

2 「その遊び」はどんな遊びだったと作者は言っていますか。解答らんに合う形で、本文より五字でぬき出して答えなさい。

問二 線②「その遊びに私達が持った興味は他の遊びとは違う」とありますが、どんな点が違うのですか。それを説明した次の文の空らんに入る、ふさわしいことばを答えなさい。ただし、(ア)は、ことばを考えて入れ、(イ)は本文中のことばをぬき出して、入れなさい。

他の遊びは(ア)にこだわるものだったが、この遊びでは、私達は(イ)に最も関心を寄せていた。

受験番号

問三——線③「無辺際に大きな世界がそこに凝縮されている小ささであった」とは、どういうことですか。それを説明したものと、最もふさわしいものを、次から選び、記号で答えなさい。

ア 硝子の破片を通して見る花の世界は小さいけれども、ふだん見ている花とは違う美しさがあり、どこまでも想像をふくらませてくれるものであったということ。

イ 硝子の破片で蓋をされた花には一点に集中した美しさがあるもののきゆうくつそうであり、広大な世界で咲かせてあげたいと思わせるものであったということ。

ウ 硝子の破片のもとで見る花の世界はごくごく小さいものだが、現実の花が色あせて見えるほど美しく、子どもたちをとりこにしようとしたということ。

エ 広大な世界で咲いている花と、硝子の破片を通して見る小さな花の世界は、全く違う性質のものであったが、どちらも子どもたちの心を動かすものであったということ。

問四——線④とありますが、花は「少しも萎れ」ていなかったのに、「やや色褪せて見え」たのはなぜですか。わかりやすく説明しなさい。

問五——線⑤「遊びのはてにするこの清算は私の心に美しいもの純潔なものをもたらした」とありますが、この部分を説明したものとして、最もふさわしいものを、次から選び、記号で答えなさい。

ア 花を自ら壊して土の中に埋めて足でふみつけるという行為は、子どもがやることとしては決してほめられるものではないが、そうでもしないと、この美しく清らかな遊びを終わらせることはできないと思わされたということ。

イ 花を土の中に埋めて足でふみつけるという行為によって、作られた美しい花の世界は現実世界から失われてしまうことになるが、同時に、土の中でもう一度よみがえって美しく芽吹くかもしれないという期待も感じさせるものであったということ。

ウ 花を自分たちで土の中に埋めるという行為は、自ら作った美の世界を自ら壊して終わらせることに他ならず、美しいものはかなさを感じると同時に心の中に永遠に残るものとして清らかさも感じさせるものであったということ。

エ 花を土の中に埋めて足でふみつけるという行為によって、目の前の美しい花の世界は失われてしまうものの、硝子の蓋の下で萎れていく花を見て心をいためるというつらい思いをしなくてもすむかもしれないと思えたということ。

問六 空らんAとDに入る、最もふさわしいことを次から選び、記号で答えなさい。(記号は一度しか使えません。)

ア もし イ さすがに ウ いくら エ あまり オ 何と カ たぶん キ まるで

問七——線⑥「林太郎はにやにや笑って」とありますが、それはなぜですか。説明しなさい。

問八——線⑦「それは解らない」とありますが、それはなぜだと考えられますか。最もふさわしいものを、次から選び、記号で答えなさい。

ア ツルがほんとうに花を隠していないのだとしたら、ツルが自分のことを好きなのだと思いこんで探していた間の楽しい気持ちも失われてしまうことになり、その当時の私にとってはどうしていたえられないことだったと思えるから。

イ 花が隠されていると思いこんでいた時は、「探しまわる間の希望」があり、楽しい気持ちでいることができたので、ほんとうは花が隠されていなかったという真実を林太郎に教えてもらおうがそうでなからうが、関係ないと思えたから。

ウ 林太郎が真実を話してくれなかったら、私は永遠に花を探し続けなければならない羽目におちいるところだったので、後から考えると話してくれてよかったと思えるが、その当時の私はずっと花を探し続けていたいと願っていたから。

エ 花が隠されていると思いきや探した時は「探しまわる間の希望」を持って楽しかったのだが、いずれその気持ちは冷めていくかもしれないし、また、実際に隠されていないものを探し続けることは、むなしいことであると思えるから。

受験番号

問九 ――線 a 「かぶとをぬぐ、b 」とっさ」のことばの使い方として正しいものを、それぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

a ア 無事に旅を終えることができそうなので、そろそろかぶとをぬぐことにしよう。

イ 君のこん虫採集に対するなみなみならぬ熱意にはかぶとをぬぐよ。

ウ 一度成功したくらいで、かぶとをぬいではいけないよ。

エ ゲームの対戦相手としては強そうだったが、かぶとをぬいで立ち向かった。

b ア とっさに勉強しても、成績はかんたんには上がらない。

イ 幼なじみにとっさに会ったので、たいへんなつかしかった。

ウ 彼は今日もとっさに会社を休んでいる。

エ 先生に質問されたが、とっさに答えが出てこず、くやしい思いをした。

問十 「はな」には、「花」のほか「鼻」など、同じ読み方で異なる漢字があります。次の同じ読み方のことばを漢字で書きなさい。

ただし、同じ漢字を二度書いてはいけません。

- 1 ①目をア^アげて山を見る。 ②国をア^アげて応援する。
- 2 ①このチームの投手は球がハ^ハヤい。 ②あきらめるにはまだハ^ハヤい。
- 3 ①気分をカ^カえて勉強する。 ②命にカ^カえてもわが子を守りぬく。
- 4 ①問題の解決にツ^ツトめる。 ②学芸会で主役をツ^ツトめる。
- 5 ①夢がヤ^ヤプられて気落ちする。 ②決勝戦でライバルにヤ^ヤプれる。

